

現代ロシアにおけるロシア正教会とナショナル・アイデンティティ

宮川 真一

The Russian Orthodox Church and National Identity
in Contemporary Russia

MIYAKAWA Shinichi

はじめに

ソ連が消滅した1991年12月以降、ロシア社会では空前の宗教ブームが巻き起こった。それ以前にソ連共産党も消滅しており、多くのロシア国民が精神的な空虚さを満たすために宗教を選んだ。しかしそうした宗教ブームは、1990年代半ばになると勢いを失っていく。当時、欧米流の市場経済が社会を混乱させ、人々が欧米的な価値に距離を置き出していた。やがて徐々に、人々のロシア正教会への回帰が始まる。1997年のモスクワ850年祭に合わせて再建された正教の総本山である救世主キリスト大聖堂は、そのような宗教復権の象徴だった。この頃から、ソ連時代に破壊された教会や鐘楼の鐘を作り直す動きが全国的に広まっていく。さらに、正教は政治過程にも巻き込まれていくことになる。大統領就任式など、公式行事の一部に宗教的な要素が持ち込まれることは以前から行われていた。それはロシア以外の欧米諸国でも同様である。しかしプーチンはそれを超え、国民が重視する正教の行事（復活祭やクリスマス）に参加するのみならず、正教にとって貢献の大きかった著名人に贈られる宗教的称号の授与式をクレムリンで開催している。プーチンは2007年に「ロシア社会の生活様式が伝統的な精神に基づくものに帰ることを高く評価します」と述べている。教会に通う信徒の多くは高齢者であるが、若い世代や社会的に成功した人々の間でも、正教は一種のブームとなって浸透し始めている。ロシア正教会は、プーチン政権以降のロシアにおいて最大

の受益者の一つとなった。ロシア正教会は、帝政時代に続いて2度目の繁栄を迎えつつある¹⁾。

現代ロシアにおいてロシア正教会は復活し台頭しつつある。しかし、各種の先行研究を見てもこの国における教会の地位は流動的であり、その役割が明確になっているとは言い難い。本稿は、現代ロシアのナショナル・アイデンティティ、国家、社会におけるロシア正教会の位置づけを明らかにしようとするものである。以下ではまず、ロシア正教会と現代ロシアのナショナル・アイデンティティとの関わりに注目する。そして、ロシア正教会とロシア国家との関係を取り上げ、ロシア正教会とロシア社会との相互作用について検討する²⁾。

1. ロシア正教会とナショナル・アイデンティティ³⁾

(1) 「ロシア正教会社会的概念の原則」

2000年8月に、ロシア正教会地方公会議は「ロシア正教会社会的概念の原則」(以下、「社会的概念の原則」と題する文書を採択した。それまでのロシア正教会には社会的ドクトリンがなく、この種の文書が公表されたことは特筆すべきである。こうした文書の不在から、ロシア正教会は社会的に受け身であると非難されてきた。実際カトリック・プロテスタントと比べると、正教は社会的な問題にさほど関わってこなかったのである⁴⁾。「社会的概念の原則」は全16章からなり、その第2章は「教会とネイション」と題している。この章の第1節は、「教会はその本質において普遍的であり、従ってネイションを超えた性格を有している。……教会は人々を民族的見地からも階級的見地からも分割するものではない」と、正教会の普遍的性格を確認する。多義的なネイションの概念については、「現代世界において『ネイション』の概念は2つの意味で用いられている。それは民族共同体という意味であり、特定国家の市民の集合体という意味でもある。教会とネイションの相互関係は、この言葉の双方の意味の文脈において検討されなければならない⁵⁾」としている。

「社会的概念の原則」の第2章・第2節は「教会の普遍的な性質は、しか

しながら、キリスト教徒がナショナルな独自性、ナショナルな自己表現の権利を持たないということの意味するのではない。反対に、教会はそれ自身において普遍的な起源をナショナルなものに結びつけている。かくして、正教会は普遍的でありながら、多くの自治独立教会から成っているのである⁶⁾」と規定し、正教会がネイションを重視する姿勢を示している。「社会的概念の原則」の第2章・第3節が、この章の核心であるように思われる。ここでは、次のように記されている。

「正教キリスト教の愛国主義は積極的であるべきである。その愛国主義は敵からの祖国防衛、母国のための仕事、人民の生活を整えることへの配慮に表れる。それは国家統治の事業に参加することを通しても表明される。キリスト教徒はナショナルな文化と人民の自己意識の維持と発展を呼びかけられている。ネイションが、市民的であれ民族的であれ、完全に又は圧倒的に宗教上単一の正教共同体であるとき、そのネイションはある意味で一つの信仰共同体——正教国民とみなされるであろう⁷⁾」。

この記述からは、正教徒が多数派を占める現代ロシアにおいて、ロシア国民は正教国民であるとのロシア正教会の立場が打ち出されていると考えられる。

(2) ロシア正教会とナショナル・アイデンティティ

現代ロシアの支配層がナショナル・アイデンティティを構築するにあたり、宗教が重視されていることは明らかである。その理由は、アレクサンドル・ベルホーフスキーによれば、①ロシアの復興に際し帝政と正教のイメージは切り離せないこと、②ロシアと西欧を分かつものとしての正教の歴史的役割が重要であること、③ロシア市民が教会を信用していること、④プーチン個人が正教徒であること、⑤イスラム・テロリズムと急進的な政治的イスラムの台頭に対する懸念が挙げられる⁸⁾。現代ロシアのナショナル・アイデンティティの中核に位置するのが、ロシア正教会を中心とする勢力である。ロシア社会は徐々に脱世俗化しつつあり、ロシア正教会の立場は「ロシアは民族的・宗教的マイノリティを伴った正教国」というものである。ロシア正教会の

「社会的概念の原則」は、宗教的伝統によって規定される文明の多極的世界に基づいている。その中で世俗的、反伝統的、自由主義的な西欧文明は唯一の例外であり、最も強力な文明である。ロシアはこの西欧文明に従属している。全ての文明の課題は西欧の権力から解放され、自身の領域に伝統的・宗教的制度の支配を復活させ、各文明が共生する新しい世界秩序を樹立することである。このように、ロシア正教会は国家より広い文明という単位でのアイデンティティを構築しようとしている⁹⁾。現代ロシア国家は、上記のアイデンティティに接近している。2005年にプーチンは、ロシアが「正教大国」であると語っている。その言葉を裏づけるかのように、現代ロシアではロシア正教会を中心とする「伝統宗教」が保護され、宗教的マイノリティは抑圧されているのである¹⁰⁾。アレクサンダー・アガジャニアンによれば、ロシア正教会の「象徴的資本」は市民的・民族的・帝國的といった様々なネーションのモデルにおいて「アイデンティティの公式」として組み入れられている¹¹⁾。

ロシアの1997年宗教法¹²⁾は、その前文でどのタイプの宗教がロシア固有のものであるかを宣言している。ニコラス・グボステフによれば、生きた信仰としての正教の傍らに、社会を統合する基盤としての「市民の」正教が現れつつある。2001年のクリスマスにプーチン大統領は祝福のメッセージを送った。そこでプーチンは、正教の価値は信徒だけでなく社会の全ての成員に当てはまるのであり、これら共通の価値は社会に関する合意と調和を促進すると述べている。このように、ロシアにおける宗教的・哲学的多元主義は、多様な非正教集団が正教の価値と制度の優位に順応することによって管理されているのである、としている¹³⁾。デリク・デイビスによれば、ロシア正教は今やロシアに現れつつあるイデオロギーの中心である。プーチンが大統領代行に就任する式典に総主教アレクシー二世を招待したように、正教キリスト教は次第に国教としての役割を引き受けるようになっている。チェチェンに向かう部隊に祝福を送るなど、今や主要なイベントには正教の聖職者が姿を見せている。ロシア正教会はすでに、半ば国教となっているとされている¹⁴⁾。

ジョバンニ・コデビラによれば、正教は事実上ある種の公式国家イデオロ

ギーとなっている。ロシア憲法第13条ではいかなる国家イデオロギーも認めていないのであり、この事態は憲法に違反するものである。国家はその将来を担う新しいエリートを養成するため、ロシア正教会と軍との同盟を切実に必要としていると言われる。ロシア社会は教権主義化しているという¹⁵⁾。廣岡正久も論じているように、「政治の“宗教化”」と「宗教の“政治化”」という構図はロシア史を貫くものである。1988年にロシア正教会は正教受洗千年祭を祝っている。当時の教会は、威信を喪失しつつあった共産主義イデオロギーに代わる統合原理を提示し、社会の精神的・道徳的権威と目されるようになる。その教会では、「正教ナショナリズム¹⁶⁾」が台頭しつつあった。これは一時的な現象ではなく、ロシアの歴史的伝統に立脚した価値原理として持続的な影響力を持っているという。総主教が教会内の極右勢力に譲歩を重ねるたびに、教会は「“国家主義的”な正教ナショナリズム」へ傾斜することになる。ロシア正教会は「“第二国会”」として国家統合の機能を果たそうとしており、その動向は無視できないと廣岡は述べている¹⁷⁾。

2. ロシア正教会と国家

今日、教会－国家関係に密接に関連する話題は公的領域において注目されている。それというのも、正教と政権にかかわる中心的な問題は依然として解決されないままであるからである。下院で採択された法律とそこでなされる党派的な駆け引きを理解することは、正教会と政権との関係を研究するにあたって欠くことのできない部分である¹⁸⁾。2000年にモスクワの「救世主キリスト大聖堂」で開催されたロシア正教会高位聖職者会議で、ロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世とその家族を含む860名の列聖が正式に決定された。当時のロシアはプーチン大統領の下、大国主義的な傾向を強めつつあった。国家と教会の関係が緊密化する中でなされたこの決定は、「教会の“政治化”」を暗示するものであった。またその決定は「教会と国家との不吉な一体化」を再び招来する可能性を秘めている¹⁹⁾。

(1) 「ロシア正教会社会的概念の原則」

ロシア正教会は2000年、前述した「社会的概念の原則」を採択している。その第3章を「教会と国家」と題しており、第3節で「現代世界において国家は通常世俗的であり、いかなる宗教的な義務にも拘束されていない。国家の教会との協力はいくつかの分野に制限され、お互いの事項への相互不干渉に基づくものである²⁰⁾」とし、次のように記している。

「国家は教会の生活、その統治、教義、礼拝生活、指導等に干渉してはならず、それは宗規の教会施設全般においても同様である。ただし法人としての活動を前提とし、国家・立法府及び権力機関としかるべき関係に入らざるをえないような側面については除外するものとする。教会は、国家が宗規規範及びその他の内部規則を尊重するよう、期待するものである²¹⁾」。

ここではソ連時代の苛烈な迫害を踏まえ、国家が教会の内部事項に干渉しないよう、再三念を押している。

第3章・第8節では、「現在の歴史的段階における教会と国家の協同分野」について以下のように列挙する。

「国際間・民族間・及び市民レベルの平和構築、人民・国民及び国家間の相互理解と協力の促進。

社会における道徳性の維持に関する配慮。

精神的・文化的・道徳的及び愛国主義的教育及び養育。

慈善事業、共同の社会的プログラムの発展。

歴史的・文化的記念碑の保護に関する配慮を含む、歴史的及び文化的遺産の保護・復旧及び発展。

教会と社会にとって重要な諸問題に関する、国家権力機関のあらゆる部門及びレベルとの対話。これにはしかるべき法律・法令・指令及び決定の作成に関するものも含まれる。

軍人及び法執行職員の世話、彼らの精神的・道徳的養育。

法律違反を予防するための努力、囚人の世話。

人文研究を含む科学。

厚生。

文化及び創作活動。

教会及び世俗的マスメディアの仕事。

環境保存の活動。

教会・国家・社会の利益のための経済活動。

家族制度・母性・幼年時代の支援。

個人と社会にとって危険となる、疑似宗教構造の活動対策²²⁾」。

以上のように、教会と国家が協同する分野は多岐に亘り、今後の発展を予想させるものとなっている。

(2) ロシア正教会の政治化

「社会的概念の原則」は教会の高位聖職者会議で決定されたものであり、修道院長ベニアミンによれば、その検討作業は半ば閉鎖的な性格を有していた。正教はロシアだけでなく、他の多くの国に存在している。ある国ではそれは国教であり、またある国では国家と分離している。従って、ロシア正教会上層部が政教分離原則について再三肯定的な意見を述べているにもかかわらず、この文書に同様の見解は見出せない。ロシア正教会は心理的に自身を国教と感じている。「教会と国家」をテーマとする第3章全体にわたる問題は、信教の自由という原則の否定である²³⁾。2001年には「社会的概念の原則」をテーマとする円卓会議の様子が『社会学研究』誌上で公表された。「社会的概念の原則」は、この種のものではロシア正教会の歴史で初めての公式な綱領的文書である。今回の円卓会議では、この最重要文書の解釈に関する以下の諸問題が議論された。①教会と国家の相互作用。②教会と様々な社会制度および運動との相互作用。③教会と他の宗教団体との相互作用である。「社会的概念の原則」という教会生活において特別な文書は、教会と国家の相互関係の新生面を予測させるものであるなど、参加者から様々な意見が出されている²⁴⁾。このように、この文書はロシア正教会内外から注目されるものとなっている。

ロシア正教会のフセボロド・チャプリンによれば、1997年宗教法の成立により、ロシア連邦では国家と宗教組織との関係にとって堅固な法的基盤が調ってきている。モスクワ総主教庁は教会－国家と教会－社会のパートナーシップを積極的に発展させることを主張している。教会はあらゆる可能な分野において国家および世俗社会と手を結ぶ用意がある。教会と国家の協力は自由で、圧力または強制のないものであるべきである。そのような協力は成功を保証するであろう。チャプリンはあらゆるロシア市民の福祉のため、ロシアにおける教会－国家のパートナーシップの実践的なモデルが探求されることを望みたい、としている²⁵⁾。2007年には「正教の政治化」傾向を示す出来事があった。モスクワで「ロシア・ドクトリン」を論議するための世界ロシア人民会議が開催された。キリル府主教はこのドクトリンを高く評価しており、これはモスクワ総主教庁の立場を表明したものである。社会制度の分野におけるドクトリンの基本命題は、①権力分立の原則、人権の至高性などの法的規範が必須のものではないこと。②ロシアは多宗教国家とは見なされない。③指導部の上層は正教に帰属する。④国公立学校の必修プログラムには宗教学習に関する科目が導入されるべきである²⁶⁾。⑤ロシアの祝日は正教のカレンダーを考慮して変更する。主要な命題は、世俗国家体制から宗教国家体制へ移行する可能性を予見することにあるのであった²⁷⁾。

(3) 教会と国家の「調和」

ロシア正教会の国家に対する積極的な姿勢を受け、多くの研究者も現代ロシアにおける教会と国家の関係を「調和」という用語で説明しようとする。リー・トレパニャーによれば、ロシア正教会が「良心の自由に関する」1997年法を支持するのは、国家を教会に変えようとしたり神権政治を創ろうとしたりするものではない。教会がロシアの政治に直接参加しているという証拠はないし、宗教政党の結成は教会指導部が断固として拒否してきたことである。ロシア正教会の指導部はビザンチンの理想である「調和」の回復に向けて動いているようである、としている²⁸⁾。ロシア憲法はこの国が世俗国家であると定めているが、教会は実のところ社会生活の全ての領域に介入している。そこでジェ・トシチェンコはロシアの政教関係につき、世俗国家だが宗

教復興している形態と位置づけている。ロシアでは宗教が次第に私事ではなくなってきたり、教会はすでに国家と完全に協働するにいたっている。現代世界の多くの国では教権主義化のみならず神政主義化が進行している。ロシアの政教関係も支配的（国家的）宗教モデルに近づいてきている、としている²⁹⁾。

アレクセイ・クリンダッチによれば、歴史的に正教の単一宗教ブロックとして、多様なロシアの政体は様々な教会－国家関係のモデルを生み出してきた。宗教権力と政治権力の調和に始まり、帝政ロシア時代には正教会が国有化された。ソ連時代には世俗化が強制され、そしてプーチンのロシアでは憲法で政教分離が規定されているにもかかわらず、正教会と国家の相互支援へ回帰している。21世紀に入り、ロシアでも宗教国家の遺産を目にすることができる、としている³⁰⁾。廣岡正久は、ロシア正教会における極右ナショナリストを代表するイオアン府主教の思想を検討している。イオアンの描く理想的な国家のイメージは、皇帝の下で一体化される「大家族」であり、国家権力が霊的共同体精神に支えられており、教会－国家関係が「調和」の原理に立脚するものであるという³¹⁾。このように、現代ロシアの教会－国家関係は、ビザンチン帝国のあり方に回帰しつつあるとの見方が優勢となっている。

3. ロシア正教会と社会

(1) 財政的基盤を確立するロシア正教会

ソ連時代から宗教活動を制限されてきたロシア正教会の財政基盤は脆弱であった。正教会は1994年、ロシア政府に経済支援を求めた。その内容は、外国製のワインとタバコを非関税でロシア人民への「人道支援」と称して輸入するというものであった。正教会に設置された「人道支援本部」の責任者には、現在の総主教キリール（当時は正教会渉外部長）が就任している。ロシア政府内に設置された「人道支援委員会」は1994年末、正教会からの要望を承認する。人道支援を語る外国製のタバコの輸入数について、ロシア政府国際人道・技術支援委員会によれば1996年の8カ月間で80億箱に上り、その総数はロシア国内におけるタバコ販売数の10パーセントを占めた。正教会は1

億ドルの利益をあげたという。ロシア人の大多数は、安価なワインとタバコを販売する正教会を歓迎した。ワインとタバコは教会の近くの雑貨店で販売されているが、それらの輸入業務を担うのは正教会が1992年に設立した慈善事業財団「ニーカ」である。この財団は非営利団体としてロシア法務省に登録されており、法律上は商業目的の会社組織ではない。ニーカ財団は正教会の財産を100パーセント管理しており、ワインとタバコ以外に石鹸・菓子・洋服・靴などを30カ国から輸入しているという。そしてニーカ財団は、正教会が次々と設立する関連企業の中心的な組織へと成長していくのである。ロシア正教会はタバコとワインの販売のみならず、ロシアの最大の輸出品である原油の販売にも着手する。ロシア政府は正教会に対して、原油の輸出税を免除する特別措置を講じた。ロシア全体の輸出品の8パーセントを占めるという数字もあり、輸出高は毎年20億ドルに達すると見込まれている。さらに正教会は、貴金属の売買にも手を広げている。正教会渉外部の管理下にある

表1 ロシアにおける宗教団体の国家登録

	教会名称	1992年	1994年	1996年	1998年
1	ロシア正教会	2880	5559	7195	8653
2	イスラム教	1216	2037	2494	2891
3	福音派キリスト教徒－バプティスト派	264	550	677	750
4	福音派信仰キリスト教徒－ペンテコステ派	30	192	351	524
5	福音派キリスト教徒	26	—	248	397
6	セブンスデー・アドベンティスト	72	156	222	323
7	宗派のないキリスト教会	37	132	213	259
8	ローマ・カトリック教会	37	138	183	223
9	エホバの証人	1	72	129	206
10	古儀式派	51	120	164	203

※数の多い順に10位までを列挙した。

出典：Е.П. Аверинцев и др.(авт. колл.), *Религиозные объединения Московской области: Справочник*, М.: Славянский диалог, 1998, с.382-385.

「アルトゲーマ社」が1994年、ロシア政府内の「ロシア連邦貴金属とダイヤモンド委員会」から未加工のダイヤモンドの販売権を譲渡された。1995年の取扱い総量は2652カラットにのぼり、売上高は600万ドルに達したという。また正教会はダニーロフ修道院の敷地内に「ホテル・ダニーロフ」を開設し、宗教関係者だけではなく一般旅行者も宿泊させている³²⁾。

(2) ロシア正教会の慈善活動

多角的な事業で経済的基盤を確立したロシア正教会は、様々な慈善活動を実施している。ロシアの失業者は2009年2月の時点で200万人を超えた。ソ連消滅とともに、「教育・医療・住居が無料」という手厚かった社会保障制度も崩壊した。しかし、今のロシアには新しい社会のセーフティネットは整備されていない。その役割を担おうとしているのが、急速に拡大しているロシア正教会である。表1は、1990年代のロシアで国家登録された代表的な宗教団体と、その登録数の推移を示している。ロシア正教会・イスラム教・プロテスタント・カトリック・新宗教と、どれも登録数を大幅に伸ばしている。その中でも、ロシア正教会の登録数は群を抜いている。

ロシア正教会が担当する慈善活動の1つが、ホームレスの人たちへの給食サービスである。氷点下20度にまで冷える厳冬のモスクワで、彼らは1時間程外で待つ。給食の数が限られているため、早い者順となっている。給食担当者によれば、犯罪が多発するロシアではホームレスの人たちの中には前科のある者も多いという。教会担当者によれば、ここに来るホームレスの多くが2年程度で亡くなっていくという。半年間も冬の寒さが続くモスクワで、ホームレスの人たちが生き延びることは困難だ。教会の温かな食事だけが彼らの体と心を温めている。ある日のメニューは野菜スープ、マッシュポテト、ソーセージ、パンであった。食事の前に教会の給仕係の祈りの言葉と短い教説がある。食事は20分程度で、食事の合間には靴・衣類・薬などが配られる³³⁾。ロシア正教会では、「慈悲の電話」と呼ばれる24時間電話相談を開設している。モスクワ在住の人は、信徒でなくても相談することができる。1日にかかってくるのは50件程度、ひとり暮らしのお年寄り・身体障害者・病气の人からの電話が多いという³⁴⁾。

ロシアでは、アルコールに救いを求め依存症に陥っていく人が増えている。患者として病院に登録されている人だけでも200万人を超え、実態はその数倍とされる大きな社会問題となっている。毎年10万人以上の人々が、アルコールが原因で命を落とす。特に冬場は、路上で凍死する人が後を絶たない。そこでロシア正教会は、冬場に「慈悲号」というバスを走らせている。「慈悲号」は、深夜のモスクワを巡回し、酔った人やホームレスの人をバスに保護する。そして彼らに食事を提供し、朝になると再び町へ送り出すのである³⁵⁾。現在、ロシア男性の平均寿命は59歳にまで落ち込んでいる。その最大の原因がこのアルコール依存症である。教会はアルコール依存症との闘いを活動の大きな柱に据える。そのために、帝政ロシア時代にあった教会付属の共同体「オプシーナ」を復活させようとしている。そこで語り合う中で、アルコール依存症から人々を立ち直らせようというのである。ある日の夕刻、教会の集会所に30人程の人々が集まっていた。男性・女性・若者から老人まで様々だ。この日初めての参加者もいた。お茶が沸かされ、持ち寄った菓子がテーブルに並べられ、アットホームな雰囲気ではじめられた。まず1枚の用紙が参加者に回され、各自名前と電話番号を書き込んでいく。この場を離れても互いに相談し合えるためである。司祭が登場し、会は始まった。何も決まりはない。話したい人が、自分の近況や悩みなどを話し、お互いに意見を述べ合う。この共同体では、70パーセントの人が半年から3年程で依存症から脱却するという³⁶⁾。

プーチン・メドベージェフ双頭体制になり、ロシア正教会と国家との関係はさらに接近している。それに伴って、教会の活動もセーフティネットとしての役割を越えて多方面に拡大している。「スパス(=救済)」テレビ局の看板番組『ドミトリー・スミルノフとのロシアの時間』は、毎週1回役に放映される。ロシア正教会幹部の1人、スミルノフ司祭が1時間生出演して、ロシア全土から寄せられる電話相談に1つずつ答えていくという内容だ。祈りの仕方から孫の洗礼名についてなど様々な質問が投げかけられ、スミルノフ司祭が正教の教えを説いていく。「スパス」テレビ局は2005年7月、初めて正教専門チャンネルとして開局した。社長のアレクサンドル・バターノフは、極東ウラジオストクの出身で熱心な正教徒だ。同郷の仲間と出資し合い放送

局を設立した。バターノフによれば、「スパス」はアレクシー二世総主教の理解と支持を得ている。「宣教師としての使命を与えられた」テレビを通じて国民を信仰に導き、正教徒としての意識を高めているのだという。視聴者は350万世帯に上り、衛星回線を利用してシベリア・極東・中央アジアなど旧ソビエト諸国に放送網を広げている。近い将来、6時間の放送を4回繰り返すかたちで、放送の24時間化に移行することを目指す。ロシア正教会もこのチャンネルに正教会幹部を出演させるなど、「スパス」を通じてさらなる信徒の獲得と教義の普及を進めようとしている³⁷⁾。

(3) ロシア正教会をめぐる世論調査

ロシア正教会の以上のような慈善活動も功を奏してか、ロシアにおける正教徒数の伸びは著しい。表2は世論調査機関「レバダ・センター」が実施してきた調査結果である。それによれば、1991年の時点で正教が31%であったのに比べ、2011年には69%まで跳ね上がっている。ロシア国民のおよそ7割

表2 あなたの宗教は何か (%)

	1991年	1994年	2001年	2004年	2007年	2010年	2011年
正教	31	38	50	57	56	70	69
イスラム教	1	2	4	4	3	4	5
カトリック	—	<1	<1	<1	<1	<1	<1
プロテスタント	—	<1	<1	<1	<1	<1	<1
ユダヤ教	—	<1	<1	<1	<1	<1	<1
その他の宗教	1	<1	2	1	1	<1	1
信徒ではない	61	58	37	32	33	21	22
回答困難	6	1	7	6	6	4	4

※「<1」は1%未満を示す。

出典：Аналитический центр Юрия Левады (Левада-центр), “Религиозная вера в России”.

[<http://www.levada.ru/print/26-09-2011/religioznaya-vera-v-rossii>] ロシアの世論調査機関「レバダ・センター」がロシア全土で実施した調査結果。2011年の調査では18歳以上の1624人に尋ねている。

表3 教会はどの程度信頼に価するか (％)

	1997年	1999年	2001年	2003年	2005年	2007年	2010年
十分に価する	38	37	38	40	44	41	54
ある程度価する	22	20	21	20	23	19	24
全く価しない	11	12	12	10	11	12	6
回答困難	30	31	28	31	22	27	17

出典：Аналитический центр Юрия Левады (Левада-центр), *Общественное мнение-2010 (Ежегодник)*, Москва, 2010, с.178. [http://www.levada.ru] ロシアの世論調査機関「レバダ・センター」が実施した調査結果。2007年調査までは2100人に、2010年調査では1600人に尋ねている。

は正教徒を自称しているのだ。正教以外ではイスラム教がわずかに増加しているものの、それ以外の宗教はほぼ横ばいという結果となっている。また表3も「レバダ・センター」による調査結果である。教会の信頼度を問うこの調査によれば、教会は徐々に社会からの信頼を勝ち得ていることが分かる。

むすび

2008年12月5日、ロシア正教会総主教のアレクシー二世が逝去した。12月上旬、モスクワの街は厳戒態勢にあり、中心部の道路は各所で閉鎖され、兵士たちが銃を手に目を光らせていた。葬儀が行われた大聖堂は弔問の人々の長い列で二重三重に取り囲まれていた。弔問には全国から8万人の人が訪れたという。クリスマス前のモスクワに飾られた華やかなイルミネーションも全て撤去され、テレビは一日中葬儀の様子を全国に中継した³⁸⁾。

本稿では、今日のロシア正教会が現代ロシアのナショナル・アイデンティティ、国家、社会おいていかなる地位を占めいかなる役割を果たしているかを考えてきた。その結果、次のことが明らかになったと言えよう。第1に、ロシア正教会は現代ロシアのナショナル・アイデンティティの中核に位置しているということである。ロシア正教会は、ロシアが「正教国」であるという立場にある。プーチンもロシアが「正教大国」であると述べている。第2

に、ロシア正教会は政治化しつつあり、現代ロシア国家に対して大きな影響力を持っている。現代ロシアにおける教会—国家関係は、ビザンチン帝国の「調和」へ回帰しつつある。第3に、この20年間でロシア正教会は勢力を急速に拡大し、社会からの信頼も増しつつある。財政的基盤を確立したロシア正教会は、慈善活動を含め積極的に社会に関わろうとしている。ソ連が消滅し、ナショナル・アイデンティティが再構築されつつある現代ロシアにおいて、ロシア正教会はその中心に位置していると言えよう。

〈注〉

- 1) ここでは以下の文献を参照。武田善憲『ロシアの論理——復活した大国は何を目指すか』[中公新書2068] 中央公論新社, 2010年, 166~168ページ; 中村逸郎「財閥化するロシア正教会」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』No.944, 2011年4月, 34ページ。
- 2) ロシア正教会の歴史については、以下を参照。廣岡正久「初期ソヴィエト政権の宗教政策」廣岡正久『ソヴィエト政治と宗教——呪縛された社会主義』未来社, 1988年, 第3章; 廣岡正久『ロシア正教の千年 聖と俗のはざままで』[NHKブックス680] 日本放送出版協会, 1993年; 廣岡正久「宗教」ユーラシア研究所編『情報総覧 現代のロシア』大空社, 1998年, 469ページ。森安達也・廣岡正久「ロシア正教会」川端香男里ほか編『[新版] ロシアを知る事典』平凡社, 2004年, 839ページ; 井上まどか「オーソドクス」井上順孝編『現代宗教事典』弘文堂, 2005年, 67~69ページ; 有宗昌子「鐘楼のある風景——序にかえて——」津久井定雄・有宗昌子編『ロシア 祈りの大地』大阪大学出版会, 2008年。
- 3) 現代ロシアのナショナル・アイデンティティについては、拙稿「現代ロシアのナショナル・アイデンティティ——1990年代を中心に——」『通信教育部論集』第6号, 2003年; 同「現代ロシアのナショナル・アイデンティティと『第二次チェチェン戦争』」『比較文明』第21号, 行人社, 2006年, 参照。
- 4) ニコライ・シャブーロフ「今日のロシア正教会と国家」津久井・有宗『ロシア 祈りの大地』22ページ。
- 5) *Основы социальной концепции Русской Православной Церкви*, II. Церковь и нация, Русская Православная Церковь официальный сайт отдела внешних церковных связей. [http://www.mospat.ru/ru/documents/social-concepts/ii/]
- 6) Там же.
- 7) Там же.
- 8) Александр Верховский, “Религия и конструирование российской «национальной идеи» в начале нового века”, Александр Верховс-

- кий (сост.), *Демократия вертикали*, М.: Центр “Сова”, 2006, с. 166-169.
- 9) Там же, с. 173-180. この点については、拙稿「現代ロシアにおけるローカリゼーション——比較文明の視点——」『ソシオロジカ』第33巻, 第1・2号, 2009年, 参照。
 - 10) Там же, с. 180-181.
 - 11) Alexander Agadjanian, “Religious Pluralism and National Identity in Russia”, *IJMS: International Journal on Multicultural Societies*, Vol.2, No.2, 2000. [www.unesco.org/shs/ijms/vol2/issue2/art2]
 - 12) この法律については、拙稿「ロシアにおける1997年宗教法の立法過程——グローバルリゼーション論との関連で——」『ソシオロジカ』第34巻, 第1・2号, 2010年; 同「現代ロシアにおける宗教復興と政教関係の変容——1997年宗教法の運用を中心に——」『宗教法』第30号, 2011年, 参照。
 - 13) Nikolas K. Gvosdev, “‘Managed Pluralism’ and Civil Religion in Post-Soviet Russia”, Christopher Marsh, Nikolas K. Gvosdev (eds.), *Civil Society and the Search for Justice in Russia*, Lexington Books, 2002.
 - 14) Derek H. Davis, “The Russian Orthodox Church and the Future of Russia”, *Journal of Church and State*, Vol.44, No.4, 2002.
 - 15) Giovanni Codevilla, “Relations between Church and State in Russia Today”, *Religion, State & Society*, Vol.36, No.2, 2008.
 - 16) これについては、拙稿「極右団体『ロシア民族統一』の思想——アレクサンドル・バルカシヨフの言説を中心に——」『ロシア・東欧学会年報』第28号, 2000年; 同「現代ロシアにおける『カルト』現象と『反カルト運動』——オウム真理教を事例として——」『ソシオロジカ』第27巻, 第1・2号, 2003年; 同「現代ロシアにおける『ロシア正教ファンダメンタリズム』」『ロシア・東欧学会年報』第31号, 2003年; 同「現代ロシアの宗教と政治——オウム真理教・『ロシア正教ファンダメンタリズム』をめぐるロシア・ナショナリズム——」中野毅 (研究代表者)『世界のグローバル化と宗教的ナショナリズム・原理主義の台頭に関する比較宗教学的研究』[平成14-17年科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書] 2007年; 同「現代ロシアにおけるナショナリズムと少数民族——マスメディアのチェチェン報道を事例として——」『比較文明』第26号, 2010年, 参照。
 - 17) 廣岡正久「ロシア政治と宗教——“正教ナショナリズム”をめぐる——」『産大法学』第30巻, 第3・4号, 1997年。
 - 18) John D. Basil, “Church-State Relations in Russia: Orthodoxy and Federation Law, 1990-2004”, *Religion, State & Society*, Vol.33, No. 2, 2005.
 - 19) 廣岡正久「現代ロシアの国家と教会——最後のロシア皇帝ニコライ二世の“列聖”をめぐる——」『産大法学』第34巻, 第1・2号, 2000年。
 - 20) *Основы социальной концепции Русской Православной Церкви*, III. Церковь и государство, Русская Православная Церковь официальный сайт отдела внешних церковных свя-

зей. [<http://www.mospat.ru/ru/documents/social-concepts/iii/>]

- 21) Там же.
- 22) Там же.
- 23) Игумен Вениамин (Новик), “Анализ 1-5 глав ‘Основ Социальной Концепции Русской Православной Церкви’”, *СОЦИС*, No.4, 2002.
- 24) “Основы социальной концепции Русской Православной Церкви (‘круглый стол’)”, *СОЦИС*, No.8, 2001.
- 25) Vsevolod Chaplin, “Law and Church-State Relations in Russia: Position of the Orthodox Church, Public Discussion and the Impact of Foreign Experience”, Silvio Ferrari, W. Cole Durham, Jr.(eds.), *Law and Religion in Post-Communist Europe* (Law and Religion Studies 1), Peeters, 2003.
- 26) これについては、拙稿「現代ロシアの公教育における宗教教育——『正教文化の基礎』コース導入をめぐって——」『ロシア・東欧学会年報』第34号, 2006年, 参照。
- 27) Л. А. Андреева, “Процесс рехристианизации в секуляризованном Российском обществе”, *СОЦИС*, No.8, 2008.
- 28) Lee Trepanier, “Nationalism and Religion in Russian Civil Society: An Inquiry into the 1997 Law ‘On Freedom of Conscience’”, Marsh, Gvosdev, *Civil Society and the Search for Justice in Russia*.
- 29) Ж. Т. Тошенко, “Государство как субъект теократии”, *СОЦИС*, No.2, 2007.
- 30) Alexey D. Krindatch, “Changing relationships between Religion, the State, and Society in Russia”, *GeoJournal*, No.67, 2006.
- 31) 廣岡正久「現代ロシアの『正教ナショナリズム』——イオアン府主教とその思想——」『産大法学』第34巻, 第4号, 2001年。
- 32) 中村「財閥化するロシア正教会」34～37ページ。
- 33) NHK取材班『NHKスペシャル 揺れる大国 ブーチンのロシア』日本放送出版協会, 2009年, 96～97ページ。
- 34) 同前, 101～102ページ。
- 35) 同前, 108～109ページ。
- 36) 同前, 110～111ページ。
- 37) 同前, 126～128ページ。
- 38) 同前, 94ページ。